

Title	慶應義塾図書館蔵『酒呑童子』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2004
Jtitle	三田國文 No.39 (2004. 9) ,p.27- 39
JaLC DOI	10.14991/002.20040900-0027
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20040900-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『酒吞童子』翻刻

石川 透

凡例

本書は、慶應義塾図書館蔵の室町物語『酒吞童子』である。本書の挿絵の影印は、石川透『慶應義塾図書館蔵 図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三年四月）に含まれている。解題等は、そちらを参照していただきたい。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「」「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。

しゅ天童子 上（題簽）

むかし、わか朝のことなるに、天地ひらけしよりこのかたは、神こくといひなから、又は、ふつほうさかんにて、人皇のはしめより、えんきのみかるとにいたるまで、わうほうともにそなはり、まつりことすなほにして、氏をもあはれみ給ふこと、けうしゆんの御代とても、これにはいかてまさるへき。

しかれとも、世の中に、ふしきのことの出来たり。たんはの

くに、大江山には、きしんのすみて、日のくるれば、きんこくたこくのものまでも、かすをも知すとりて行。みやこのうちにてとる人は、みめよき女はうの、十七八をかしらとして、これをもあまたとりてゆく。

いづれもあはれはおとらねとも、こゝに、ものゝあはれをとめしは、院に宮つきたてまつる、いけたの中納言くにたかとして、御おほえめてたくし、たからはうちにみち／＼て、ふつきの家にてましますか、ひとりひめをもち給ふ。

三十二さうのかたちをうけ、ひしんのひめ君を、見きく人、心をかけぬものはなし。ふたりのおやの御てうあひ、なのめならず。かほとにやさしきひめ君を、ある日の暮のことなるに、行かたしらすすせ給ふ。

ちゝくにたかをはしめとし、きたの御かたの御なけき、おちやめのとや女はう達、そのほか、ありあふものまでも、うへをしたへとかへしける。

中納言は、あまりのことのかなしきに、さこんをめされ、「いかに、さこん、うけ給はれ。此ほと、みやこにかくれなき、むらをかのまさときとて、名よのはかせのありときく。つれてま

いれ」と、おほせける。「うけ給はる」と申て、つれて御しよへそまいりける。

いたはしやな、ちゞくにたかも、みたいところも、はちも人めもいらはこそ、はかせにたいめんめされつゝ、「いかに、まさとき、うけ給はれ。それ、人のならひにて、五人十人ある子さへ、いつれをろかはなきならひ、身つからは、たゞひとりのひめを、ゆふへのくれほとに、ゆき方しらす、みうしなふ。ことし十三、とらのとし、むまれてよりもこのかたは、えんよりしたへおるゝさへ、おちやめのとのつきそひて、あらき風をもいとひしに、まよひへんけのわさならは、みつからをも、もろとも、なとや、つれてはゆかさりし」と、たもとをかほにをしあてゝ、「うらなひ給へ。はかせ」とて、れうそく万ひき、はかせかまへにつませつゝ、「ひめか行ゑをしるならは、かすのたかをえさすへし。よくくうらなひ（数字欠力）」。

『挿絵・第一図・欠』

もとより、はかせは、めいしんにて、ひとつのまきものとり出し、くたんのていをみわたし、よこ手をちやうとうち、「ひめ君の御ゆくゑは、たんはのくに、大江山のきしんかわさにて候なり。御いのちにはしさいなし。なを、それかしかほうへんにて、えんめいといのらん。なにのうたかひあるへきぞ。此うらかたをよく見るに、くはんせおんに、御きせいあり、くはんおんへ御まいりあり、よきに御きせいまさは、ひめきみ、さうなくみやこにかへらせ給はん」と、見とすやうにうらなひて、はかせはわかやにかへりける。

中なこんも、みたいところも、きこしめし、「これは、ゆめか

や、うつゝか」と、なけかせ給ふ御ありさま、なにゝたとへむかたもなし。

中なこんとは、おつるなみたのひまよりも、いそぎ、たいりへそうもんありければ、みかと、えいらんましゝて、くきやう大しん、あつまりて、いろくせんき、まちく也。

その中に、くはん白との、すゝみ出、「さかの天わうの御代るとき、これににたりしことありしに、こうほう大しのふうしこめ、こくとをさつて、しさいなし。さりながら、今こゝに、らくはうをめされつゝ、『きしんうてよ』との給はゝ、きたみつ、すゑたけ、つな、きんとき、ほうしやうをはしめとし、この人くには、おにかみも、おちをのゝきて、おそれをなすと、うけ給はる。此ものともに、仰せつけられ候へかし」。

みかと、「けにも」とおほしめし、いそぎ、らくわうをそめされける。

よりみつ、ちよくをうけ給はり、いそぎ、さんたいつかまつりけるに、みかと、えいらんましゝて、「いかに、よりみつ、うけ給はれ。たんはのくに、大江山には、きしんかすみて、あたをなす。わかくになれは、そつとうち、いつくに、きしんのすむへきぞ。いはんや、ちかきあたりにて、人をなやますいはれなし。はやく、たいらけよ」とのせんしなり。

よりみつ、ちよくめいうけ給はり、「あつはれ、大しのせんしかな。きしんは、しんつうへんけのものなれは、うつてむかふとするならば、ちりや木のはと身をへんし、われらほんふのまなこにて、見つけん事はかたかるへし。さりながら、ちよくをは、いかで、そむくへき」。

〔挿絵・第二図〕

いそぎにかへりつゝ、人／＼をめしよせて、「われらちからにては、かなふまし。仏神にいのりをかけ、神のちからをたのむへし」。「もつともしかるへし」とて、よりみつとほうしやうは、やはたにしやさんありければ、つな、きんときは、すみよしへ、さたみつとすゑたけは、くま野へさんろうつかまつり、さま／＼の御りうくはん、もとより、ふつほう、神こくにて、神もなふしゆまし／＼て、いつれも、あらたに御利しやうあり。

〔挿絵・第三図〕

よりみつ、おほせけるやうは、「このたひは、人あまたにてかなふまし。以上六人か、山ふしにさまをかへ、山路にまよふふせいにて、たんはのくに、おにかしやうへたつねゆき、すみかたにもしるならば、いかに、ふりやくをめくらして、うつへき事はやすかるへし。めん／＼、おひをこしらへて、くそく、かふとを入給へ。人／＼、いかに」とありければ、「うけ給る」と申て、めん／＼、おひをこしらへける。

まつ、らいくはうのおひには、らんでんくきりと申て、ひおとしの御よろひ、おなしけの五まいかふとに、しゝわうとこそ申けれ。千すいと申せしつるき、二しやく一すん候しをおひの中にそいれ給ふ。

ほうしやうは、むらさきおとしのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いはきりと申て、二しやくありけるこなきなた、ふたへにかねをのへつけて、三そくあまりにねちきりて、おひの中へそ入給ふ。

つなは、もえきのはらまきに、おなしけのかふとをそへ、お

にきりといふ太刀を、おひの中にそ入給ふ。

さたみつとすゑたけ、きんときも、おもひ／＼のはらまきに、おなしけのかふとをそへ、いつれもおとらぬつるきを、おひの中にそいれにける。

〔挿絵・第四図〕

さゝへと名つけて、さけをもち、火うち、つけたけ、あまかみを、おひのうへにそとりつけて、思ひ／＼のうちかたな、ときん、すゝかけ、ほらのかひ、こんかうつえをつきつれて、日本こくの神ほとけに、ふかくきせいを申つゝ、みやこを出て、たんはのくにへといそかせ給ふ。

この人／＼のありさまは、いかなる、てんまはしゆんも、おそれをなすへきとおほえたり。いそかせ給へは、ほともなく、たんはのくに／＼きこえたる、大江山にそつき給ふ。

さるほとに、こゝに、しはかる人にゆきあひて、よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、山人、このくにのせんちやかたけは、いつくそや。おにのいわやを、ねんころにをしへてたへ」とそ、おほせける。

山人、このよし、うけ給はり、「このみねを、あなたへこえさせ給ひつゝ、又、たにみねのあなたこそ、おにのすみかと申て、人けん、さらに行ことなし」と、かたりける。

よりみつ、きこしめし、「さらは、このみね、こせや」とて、「たによ、みねよ」と、わけのほり、とあるいはあな、みたまへは、しはいほりのその中に、おきな三人ありけるを、らいくはう、このよし御らんして、「いかなる人にてましますぞ。おほつかなし」とそ、おほせける。

おきな、こたへて仰せけるは、「われくは、まよひへんけのものにてはなし。一人は、津のくにの、かけのこほりのものにてあり。一人は、津のくにの、おとなしきとのものにてあり。今一人は、京ちかき、山さきのものにてあり。此山のあなたなる、しゆてんとうしといふおに、つまをとられ、むねんきに、そのかたきをもうたんため、このころ、こゝにきたりたり。きやくそなたをよく見るに、つねの人にてまします。ちよくちやうをかうふりて、『しゆてんとうしをほろぼせ』との、御つかひと見えてあり。此三人のおきなこそ、つまをとられて候へは、せひ、せんたちを申へし。おひをもおろし、心うちとけ、つかれをやすめ給ふへし。きやくそなた」とそ申されける。らいくわう、このよし、きこしめし、「おほせのことく、われくは、山みちにふみまよひ、くたひれて候へは、さらは、つかれをやすめん」と、おひともをおろしをき、さへのさけをとり出し、三人の人くは、「御しゆをきこしめせ」とて、参らせる。

おきな、おほせけるやうは、「いかにもして、しのひいらせ給ふへし。かのおに、つねにさけをのむ。その名をよそへて、しゆてんとうしと名つきたり。さけをもち、えひて、ふしたるものならば、せんこをしらす候なる。この三人のおきなこそ、こゝに、ふしきの酒をもつ。その名をしんへんきとくしゆといひ、神のはうへん、おにのとくさけとよむしそかし。このさけ、おにかのむなは、ひきやうしさいのちからもうせ、きるともつくとも、しるましき。御身たちか、このさけをのめは、かへつて、くすりとなる。さてこそ、しんへんきとくしゆとは、の

ちの世までも申へし。なをく、きとくをみすへし」とて、ほしかふとをとりいたし、「御身は、これをきたまひて、きしんかくひをきりたまへ。なにのしさいもあるましき」と、くたんのさけをあひそへて、よりみつにこそ、くたされける。

〔挿絵・第五図〕

さて、六人のひとくは、このよしを御らんして、「さては、三しの御神の、これまてけんししますか」と、かんるいきもにめいしつゝ、かたしけなくとも、中くは、ことはにも、いひかたし。

そのとき、おきなは、いはやをたちいて、「なをく、せんたち申さん」とて、せんちやうかたけをのほりつゝ、くらきいはあなを、十ちやうはかり、くゝりいて、ほそたに川にいて給ひ、おきな、おほせけるやうは、「この川かみを、のほらせ給ひて、御らんせよ。十七八なる上らうの、おはすへし。くはしく、あひてとひたまへ。きしんのうつへきそのときは、なをく、われらもみつくへし。住よし、やはた、くま野の神、これまて、けんしきたる」とて、かきけすやうに、うせ給ふ。

〔挿絵・第六図〕

六人のひとくは、このよしをみたまひて、三しの神の、かへらせ給ふ御あとを、ふしおかみ給ひつゝ、をしへにまかせて、川上をのほらせ給ひて、み給へは、をしへのことく、十七八の上らうの、ちのつきたる物をあらふとて、なみたとゝもにましますか、よりみつ、このよし御らんして、「いかなるものぞ」と、はせたまへは、ひめきみ、このよしきこしめし、「さん候。身つからは、みやこのものにて候か、ある夜、きしんにつかま

れて、これまでまいりて候か、こひしきふたりのちゝはゝや、おちやめのとにあひもせて、かくあさましきすかたをは、あはれとおほしめせや」とて、たゝ、さめくゝとなき給ふ。

おつるなみたのひまよりも、「あら、あさましや。このところは、おにのいはやと申て、人けん、さらにくる事なし。きやくそうたちは、これまできたらせ給ふそや。いかにもして、みつからを、みやこへかへしてたひたまへ」と、おほせもあへす、たゝ、さめくゝとなきたまふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「御身は、みやこにては、たれの御子」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、花そのゝ中なこんの、ひとり姫にてありけるか、われらはかりにかきらす、十よ人おはします。このほと、いけたの中納言くにたか卿のひめ君も、とられて、これにまします□□してをきて、そのゝちは、身のうちよりも、ちをしほり、さけと名つけて、ちをはのみ、さかなと名つけて、しゝむらをそき、くはるゝことのかなしみを、そはにてみるもあはれなり。ほり川の中なこんのひめ君も、けさ、ちをしほられ給ふそや。そのかたひらを、身つからか、あらふことのかなしさ、まことにものうき事そ」とて、さめくゝとなき給へは、おにをあさむく人ゝは、「けに、ことはり」とて、ともに、なみたにむせひ給ふ。

しゅ天童子 中 (題簽)

よりみつ、おほせけるやうは、「おにをたいらけ、御身たちを、ことくゝ、みやこへかへさん、そのために、これまで、たつねまいりたり。おにのすみかを、ねんころに、かたらせ給へ」

とありければ、ひめ君、このよし、聞しめし、「これは、ゆめかや、うつゝかや。そのきならは、かたり申さん。此川かみを、のほらせ給ひて御らんせよ。くろかねのつるちをつき、くろかねのもんをたて、又、そのうちには、つるちをつき、あかゝねのもんをたて、くちには、おにかあつまりて、はんをしてこそゐたりけれ。いかにもして、もんよりうちへ、しのひいりて御らんせよ。るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへ、たてをきたり。その中に、四節の四季をまなひつゝ、てつの御所と名つけて、くろかねにて、やかたをたて、よるにもなれば、そのうちに、我らはしめ、あまたの女房をあつめ、あいせさせ、あしてをさすらせ、おきふし申せしか、らうのくちには、けんそくともに、ほしくまとうし、くまとうし、とらくまとうし、かねとうしとて、四天わうとなつて、はんをせさせてをきけり。かれら四人のちからのほと、いかほと有ありとも、たとへん方もなきときく。しゆてんとうしかそのすかた、いろいろすあかく、せいたかく、かみはかふるにをしみたし、ひるのあひたは人なれとも、よるにもなれば、おそろしき、そのたけいちやうあまりにして、たとへていはんかたもなし。かのおに、つねにさけのむ。えひて、ふしたるものなれば、わか身のうするもしらぬなり。いかにもして、しのひいり、しゆてんとうしにさけをもち、えひてふしたるところをみて、思ひのまゝに、うちたまへ。きしんは、てんめいつきはてゝ、つゐには、うたれ申へし。いかに、さいかくおはしませ、きやくそうたち」とそ、仰ける。

さて、六人のひと／＼は、ひめ君のをしへにまかせて、川かみをのほらせ給へは、ほともなく、くろかねのものにつく。はんのおにと、これを見て、「こは、なにものそ、めつらしや。このほと、人をくはすして、人をこひけるおりふしに、くになつたつむしとんで、火に入とは、今こそ思ひしられたり。いさや、引きき、くはん」とて、われも／＼といさみける。

その中に、おにひとり、申けるは、「あはて、ことをしそんすな。かくめつらしきかなをは、わたくしにては、かなふまし。かみへ、ことはり、きよいしたいに、引ききくはん」と申ける。

「もつとも」とて、それよりも、おくをさして参りつゝ、此よし、かくといひければ、

〔挿絵・第二図〕

とうし、このよし、きくよりも、「こは、ふしきなるしいかな。何さま、たいめん申へし。こなたへ、しやうし申せ」とありければ、六人のひと／＼を、えんのうへにそ、しやうしける。

そのうち、なまくさき風ふきて、らいてん、いなつま、しきりにして、せんこをはうする、その中に、いろいろすあかく、せいたかく、かみはかふろにをしまし、わうかうしのをり物に、くれなゐのはかまをきて、てつちやうをつえにつき、あたりをにらんで立たりしは、身のけもよたつばかりなり。

とうし、申けるやうは、「わか住山は、つねならず、せきかんかゝとそひえて、たにふかくして、みちもなし。てんをはしるつはき、地をはしるけたものまで、みちかなければ、くる事なし。いはんや、めん／＼は、人けんとして、天をかけりてきた

るかや。かたれ。きかん」とそ申ける。

よりみつは、きこしめし、「我らかきやうのならひととして、山路を家とする事は、我／＼かみなかみに、えんのきやうしやと申せし人、みちなき山をふみわけて、五き、せんき、あつきとて、きしんのありしにゆきあふて、しゆもんをさつけ、えしきをあたへ、今にたえせず、とし／＼に、えしきをあたへ、あはれむなり。此きやくそうも、そのなかれをくむ。ほんこくは、てはのはくろにすむものなりしか、大みね山にしこもり、やう／＼春にもなりければ、みやこ一けん、そのために、ゆふへ、夜をこめ、立いつる。せんたうふみまよひ、みちあるやうに心えて、これまできたりて候なり。とうしの御めにかゝる事、ひとへに、えんのきやうしやの御引あはせ、なによりもつて、うれしうこそ候へ。一しゆのかけ、一かのなかれをくむことも、みな、これ、たしやうのえんときく。御やとを、すこしかし給へ。御しゆをひとつ、もたせて候へは、おそれながら、とうしへも、御しゆひとつ申さん。我らも、これにて、御しゆ給はり、夜もすから、さかもりせん」とそ申されける。

〔挿絵・第三図〕

とうし、此よし、きくよりも、「さては、くるしうなき人か」と、えんよりうへへよひあけて、なをも、心をしらんため、とうし、申されけるやうは、「もたせの御しゆのありときく。我らも又、きやくそうたちにも、御しゆ一つ申さん。それ／＼」とありければ、「うけ給はる」と申て、さけと名つけて、ちをしほり、てうしに入て、さかつきそへ、とうしかまへにそをきにける。

とうし、さかつきとりあけて、らいくわうにこそ、さしにけれ。よりみつ、さかつきとりあけて、これも、さらりとほされけり。しゆてんとうしか、これを見て、「そのさかつきを、つきへ」といふ。「うけ給はる」とて、つなにさす。つなも、さかつきひとつうけ、さらりとこそほしにけれ。

とうし、申けるやうは、「さかなはなきか」とありければ、「うけ給はる」と申て、今きりたるとおほしくて、かいなともゝと、いたにそへ、とうしかまへにそをきにける。

とうし、このよし、みるよりも、「それ、こしらへて参らせよ」、「うけ給はる」とて、たつところを、よりみつは、御らんして、「それかし、こしらへ、給はらん」と、こしのさしそへ、するりとぬき、しゝむら四五寸、をしきりて、したうちしてこそくはれけれ。

つな、このよしをみるよりも、「御心さしのありかたさよ。それかしも給はらん」と、これも、四五寸、をしきりて、うまそうにこそくひにけれ。

〔挿絵・第四図〕

とうし、このよし、みるよりも、「きやくそうたちは、いかなる山にすみなれて、かゝるめつらしき、さけさかなをまいる事こそ、ふしきなれ」。

よりみつ、きこしめし、「御ふしんは、ことはりなり。我らかきやうのならひにて、しひとて給はるものあれば、たとへ、心にうけすとも、いなといふ事さらになし。ことに、かやうのさけさかなをくふに、うかひしいはれあり。うつもうたるゝも、ゆめのうち、そくしんそくふつ、これなるゆへ、くふに二つの

あちはひなし。我らもともにかふなり。あら、かたしけな」と、らいすれば、きしんにわうたうなきとかや、とうしも、かへりて、らいくはうを、らいはいするこそ、うれしけれ。

とうし、申されけるやうは、「心にそまぬさけさかなを、参らせけるこそ、ほいなけれ。よのきやくそうへは、むやく」とて、心とけてそみえにける。

そのとき、らいくわう、さしきをたち、くたんのさけを取出し、「これは、みやこよりの、ちさんのさけにて候へは、おそれなから、とうしへも、御しゆひとつ、まいらせん。御心みのために」とて、よりみつ、ひとつ、さらりとほし、しゆてんとうしにさし給ふ。

とうし、さかつきうけとり、これも、さらりとほしにけり。

けにも、しんへんきとくしゆ、あら有かたや、ふしきのさけのことなれば、そのあち、かんろにのこくにて、心もこと葉もをよはれず、なのめならすにようこひて、「わかさいあいの女はうあり。よひ出して、のません」とて、くにたかのひめきみと、花そのゝひめきみを、よひいたし、さしきになをしけり。

らいくはう、このよし、御らんして、「これは、又、みやこよりの上らうたちにまいらせん」と、おしやくにこそは、たゝれけれ。

〔挿絵・第五図〕

とうし、あまりのうれしさに、えひほれ、申けるやうは、「それかしかにしへを、かたりてきかせ申へし。ほんこくは、ゑちこのもの、山てらそたちのちこなりしか、ほうしにねたみあるにより、あまたのほうしをさしころし、その世にひえの山に

つき、『わかすむ山ぞ』と思ひしに、てんけうといふほうし、ほとけたちをかたらひて、『わかたつそま』とて、おひいたす。ちからをよはす、山をいて、又、このみねに住しとき、こうほうし大しといふえせものか、ふうして、こゝをもおひいたせば、ちからをよはぬところに、今は、さやうのほうしもなし。いまは、かうやの山にうちやうす。今又、こゝにたちかへり、なにのしさいも候はず。みやこよりも、我ほしき上らうたちをめしよせて、おもひのまゝにめしつかひ、さしきのていを御らんせよ、るりのくうてん、玉をたれ、いらかをならへたてをきて、はんぼくせんさんまのまへに、春かとおもへば、なつもあり、秋かとおもへば、ふゆもあり。かゝるさしきのそのうちに、てつの御所とて、くろかねにてやかたをたて、よるにもなれば、そのうちに、女はうたちをあつめをき、あし手をさすらせ、をきふし申か、いかなるしよてんわうの身なり共、これには、いかてまさるへき。されとも、心にかゝりしは、みやこの中にかくれなき、らくわうと申て、大あく人のつはものなり。ちからは日本にならひなし。又、らくわうからうとうに、さたみつ、すゑたけ、きんとき、つな、ほうしやう、いつれもふんふ二たうのつはものなり。これら六人のものともこそ、心にかゝり候なり。それをいかにと申に、過つる春の事なるに、それかしかめしつかふ、いはらきとうしといふおにを、みやこへつかひにのほせしとき、七てうのほり川にて、かのつなにわたりあふ。いはらき、やかて心得て、女のすかたにさまをかへ、つなかあたりに立より、もとゝりを、むすとりつかんて、こんとせしところを、つな、このよしをみるよりも、三しやく五寸、

するりとぬき、いはらきかかたうてを、水もたまらず、うちおとす。やうく、ふりやくをめくらして、かいなをとりかへし、今はしさいも候はず。きやつはらかむつかしきに、われは、みやこにゆく事なし。

そのうち、しゆてんとうしは、よりみつの御すかたを、めをもはなさず、うちなかめ、「さて、ふしきの人くや。御身かすかたをよくみるに、らくわうにておはします。さて、そのつきは、いはらきかかひなをきりし、つなにてあり。のこる四人の人くは、さたみつ、すゑたけ、きんとき、ほうしやうとこそ、おほえたれ。我らかみるめは、ちかふまし。いふしう候。おたちあれ。是にありあふおにともよ、こゝろゆるしてけかするな。我らも、まかりたつそ」とて、いろをかへてそ、ひしめきける。

らくわう、此よし御らんして、「こゝをちんしそんするならば、この大事」とおほしめし、もとより、ふんふ二たうの人なれば、少しもさはかぬけしきに、からくど打わらひ、「さても、うれしのおほせかな。日ほん一のつはものに、山ふしともかたるとや。そのらくはうも、すゑたけも、なをきくたにもはしめにて、まして、みることはなし。たゞ今、おほせをよくきけは、あくきやくふたうの人ときく。あら、もつたいなや、あさましや。さやうの人には、にるもいや。我らかさやうのならひととして、ものゝいのちをたすけんため、山路を家とする事も、うへたるこらうに身をあたへ、うしやうむしやうをすくはんため、しやかむにによらいのいにしへは、しうふうと名をつけて、しよこくをしゆ行にいて給ふ。あるとき、山路をと

をらせ給へは、ふかきたにのそこよりも、なにものなるとはしらねとも、『しよきやうむしやう』となへければ、たにゝくたりて御らんするに、九そく八めんのきしんとて、かしらは八つ、あし九つ、さもおそろしきおにそ有。しうふう、かれにちかつきて、『たゝ今となへしはんけのもん、われにさつげよかし』とある。きしん、こたへていふやうは、『さつけんことはやすけれど、うへにのそみてちからなし。人の身をたにふくするならば、となへん』とこそ申ける。しうふう、このよしきこしめし、『それこそ、やすきことなるへし。のこりのもんとなふるならば、なんちかえしきに、それかしならん』と仰ければ、きしん、なのめによろこひて、のこりしもんをそ、となへける。『せしやうめつほう、しやうめつくゝみ、しやくめつゝみらく』とゝなへければ、しうふう、これをさつかりて、『あら、有かたや』とらいしつゝ、きしんかくちにいらせ給へは、すなはち、ほさつとあらはれ、きしんは、すなはち、ひるしやなふつ、しうふうは、しやか仏なり。又ある時は、これやこの、はとのはかりに身をかけしも、みなこれ、いけるをたすけんため、これにありあふ山ふし、おなしきやうにて候へは、もんをひとつさつげつゝ、はやく、いのちをめさるへし。つゆちりほともおしからし』と、さもありさうにの給へは、とうし、これにたはかれ、おもてのいろをなをしつゝ、『仰をきけは、ありかたや、かのやつはるか、これまでは、よもきたらしとは思へとも、つねに心にかゝるゆへ、えひても、ほんちわすれす』とて、『御ちさんのさけにえひ、たゝ、くりことゝおほしめせ。あかきは、さけのとかさかし。おにと、なおほしめされそよ。われも、そなたの御すか

た、うちみには、おそろしけれと、なれて、つほいは山ふし』と、うたひかなてゝ、心をうちとけ、さしうけくゝ、のむほとに、これぞ、しんへんきとくのさけなれば、五さう六ふにしみわたり、こゝろもすかたもうちみたれ、『いかに、ありあふおにともよ、かくめつらしき御しゆ、ひとつ、御まへにて下されて、きやくそうをなくさめよ。一さしまへ』とそ仰ける。

「うけ給はる」とたつ所を、よりみつ、此よし御らんして、
「まつ、御しゆ一つ申さん」とて、ならひゐたりしおにとともに、くたんのさけをもち給へは、五さう六ふにしみわたり、せんこも、さらにわきまへす。

その中に、いしくまうしは、すんと立て、まふたりける。

宮こよりいかなる人のまよひ来て

さけやさかなのかさしとはなる

「おもしろや」と、をしかへしくゝ、二三へんこそ、かなてけれ。

〔挿絵・第六図〕

此心をよくきけは、「これにありける山ふし共を、さけやさかなになすへし」との、歌の心とおほえたり。

やかて、らくくわう、おしやくにこそ、たゝれける。とうしかうけたるさかつきを、つな、此よしみるよりも、すんと立てそ、まふたりける。

としをへておにの岩屋に春のきて

風やさそひて花やちらさん

「おもしろや」と、これも又、をしかへし、二三へんこそ、まふたりけれ。

此歌の心は、「是に有あふおに共を、あらしに花のちることく
になすへし」との歌の心を、おには、すこしも聞しらす、只、
「おもしろや」とかんしつゝ、したい／＼にえひほれて、とう
し、申されけるやうは、「いかに、ありあふおにともよ、きやく
そうたちを、よきになくさめ申へし。それかしか代くはんには、
二人の姫をのこしをく。それに、しはらくおやすみあれ。明日
たいめん申へし」とて、とうしは、おくにそ入にける。

しゆ天童子 下 (題簽)

残るおにと、とうしのかへらせ給ふをみて、こゝやかしこ
にふしたる。さなから、しにんのことくなり。

らいくわう、このよし御らんして、二人のひめ君をちかつて、
「御身たちは、みやこにては、たれ人のひめにてましますぞ」。
「さん候。身つからは、いけたの中納言くにの、ひとりひめに
てありけるか、ちかきほとにとられ来て、こひしきふたるのちゝ
はゝや、おちやめのとにあひもせて、かく、あさましきありさ
まを、あはれとおほしめせや」とて、たゝ、さめ／＼となき給
ふ。

「今一人の姫君は」と、とはせ給へは、「さん候。身つからは、
よし田のさいしやうの、をとひめててさふらひしか、中／＼、
いのちのきえやうて、うらめしさよ」と、かきくとき、二人の
姫君もろともに、こゑもおします、きえいるやうに、なき給ふ。
よりみつ、このよし、きこしめし、「たうりなり。ことほりな
り。さりながら、おにともを、こんや、たいらけて、御身たち
を、みやこへ御とも申つゝ、恋しきふたりのちゝはに、けんさ

んせさせ申へし。おにのふしとを、われ／＼に、ねんころにみ
ち引給へ」とありければ、ひめ君たちは、きこしめし、「これは、
夢かや、うつゝかや。そのきにてあるならば、おにのふしとを、
われ／＼、よきにあんない申へし。御ようあれ」とのたまへは、
「挿絵・第一図」

らいくわう、なのめにおほしめし、「そのきにてさふらはゝ、め
ん／＼、ものゝくしたまへ」とて、まつ、かたはらにぞ、しの
はれける。

さて、よりみつの出たちには、らんでんくさりと申て、ひお
としのよろひをめし、三しやの神の給はりし、ほしかふとに、
おなしけの、しゝわうと申せし御かふとを、をしかさねてめさ
れつゝ、ちすいと申せしつるきをもち、「なむや、八まん大ぼさ
つ」と、心中にきねんして、すゝみ給へは、のこる五人のひと
／＼も、おもひ／＼のよろひをき、いづれもおとらぬつるきを
もち、女房をさきにたて、こゝろしつかにしのひゆく。

ひろささしきをうち過て、いしはしをうちわたり、うちので
いを見給へは、みな／＼、さけにえひふして、「たそ」とかむ
るおにもなし。

さて、のりこえ／＼、み給へは、ひろささしきのその中に、
くろかねにてやかたをたて、おなし戸ひらに、くろかねのふと
きくはんぬき、さしかためたり。ほんふのちからにて、中／＼、
うちへいるへき。

「挿絵・第二図」

あらありかたや、三しやの神のあらはれ給ひつゝ、六人の人
／＼に、「よく／＼、これまてまいりたり。さりながら、心やす

く思ふへし。おにのあし手を、われく、くさりにてつなきて、四方のはしらにゆひつけて、はたらくけしきはあるましきそ。よりみつは、くひをきれ。のこる五人のものとは、あとやさきに立まさり、すんくにきり、すてに、しさいはあらし」との給ひて、もんの戸ひらをくしひらき、かきけすやうにうせ給ふ。

「さては、三しやの神たちの、これまで、あらはれ給ふか」と、かんるい、きもにめいしつゝ、たのめしは思へとも、をしへにまかせて、らいくわうは、かしらのかたに立まはり、ちすいをするりとぬき給ひて、「なむや、三しやの御神たち、ちらをあはせてたひ給へ」と、三度らいして、きり給へは、きしん、まなこをみひらきて、「なさけなしとよ、きやくそうたち。いつはりなしときゝつるに、きしんにわうとうなきものを」と、おきあからんとせしかとも、あしてはくさりにつなかれて、おくへきやうのあらされは、おくゑをあげてさけふゑ、らいてん、いかつち、天地もひゝきわたりけり。

もとよりも、つはものとも、かたなはつるき、たちはやに、すんくにきり給へは、くひは天にそまひあかる。されは、らいくはうを目にかけて、たゝかみとねらひしかとも、ほしかふとおそれをなし、その身にしさいはなかりけり。

〔挿絵・第三図〕

かくて、あし手、とうまで、きりちらし、大にはさしていて給ふ。あまたのおにのその中に、「いはらきとうし」と名のりて、「しうをうちしやつはらに、手なみのほとをみせん」とて、おもてもふらす、かゝりける。

つなは、このよしみるよりも、「手なみのほとはしりつらん。めにものみせてくれん」とて、おふつまくつ、しはしかほと、たゝかひけれとも、さらに、せうふは見えきりけり。をしならへて、むすとかみ、うへをししたへと、もてかへす。

つなかちからは三百人、いはらきかちからやつよかりけん、つなを、とつてをしする。らいくはう、このよし御らんして、はしりかゝつて、いはらきかほそくひ、ちうに打おとせは、いしくまとうし、かねとうし、その外、もんをかためたる、十人あまりのおにともか、このよしをみるよりも、「今はとうしはまします、いつくをすみかとなすへきそ。おにのいは屋もくつれよ」と、おめきさけんてかゝりける。

六人の人くは、此よしをみ給ひて、「やさしのやつはらや。手なみのほとをみせん」とて、ならひ給ひしひやうほうを、とりいたさせ給ひて、あなたこなたへおひつめて、あまたのおにとも、ことくくたいらけて、しはらく、いきをそつかれける。

〔挿絵・第四図〕

よりみつ、おほせけるやうは、「いかに、女房たち、はやく、いてさせ給ふへし。今は、しさいもるまし」と、のたまへは、このゑをきくよりも、とられてまします女はうたち、人屋のうちより、ころひおち、らいくはうをめにかけて、「これは、ゆめかやうつゝかや。われらをも、たすけてたひ給へ」と、われもくゝ手をあけて、なけきかなしむありさまを、ものによくくゝたとふれば、つみふかきさい人か、こくそつの手にわたり、むけん地こくにおとされしを、地さうほさつのしやくちやうにて、「をんかかゝせんさいそはか」と、すくひとらせ給ひしも、

かくやと思ひしられたり。

そのとき、六人のひとくは、姫君たちをさきにたて、おくのていを見給へは、くうてんらうかく、玉をたれ、四節の四季をまなひつゝ、いらかをならへてたてたるは、こゝろもことはもをよはれす。

又、かたはらを見給へは、しこつ、白こつ、なましき人、あるひは、人をすしにし、あるひは、木のえたにかけほして有もあり。あるひは、いきたえ、はんしのていにて、あし手をきられし人、中く、めもあてられぬありさまなり。

その中に、十七八の上らうの、かたうておとされ、もゝそかれしか、いまたいのちはきえやられて、なきかなしみてましますを、よりみつゝ、みたまひて、「あのひめ君は、みやこにて、たれのひめ君にてましますぞ」。

女はうたちは、きこしめし、「さん候。あれこそは、ほり川の中なこんのひめ君にてさふらふ」とて、いそぎ、そはにはしりよりて、「いかに、ひめ君、いたはしや。身つからとは、きやくそうたちの、おに、ことくくたいらけて、宮こへつれてかへらせ給ふか、御身一人のこしをき、かへるへきかや、かなしやな。かくおそろしきこくにも、御身に心のひかされ、あとに心のゝこるぞ」と、かみかきなてゝ、「なにことにてもあれ、御心におほしめさるゝことあらは、われくゝに、かたらせ給へ。みやこへのほり候はゝ、御ちゝはゝに、よきにつたへて参らすへし。姫君、いかに」とありければ、

『挿絵・第五図』

このよしをきこしめし、「うらやましの人くゝやな。かくあさま

しきつゆの身の、はやくもさきにきえもせて、かやうのすかた、人くゝに、みえまいらすることの、はつかしきよ。みやこにのほらせ給ひなは、ちゝはゝの、このことをしろしめされてさふらはゝ、わか身の事を、中くゝに、なけき給はんことの、かなしきよ。『おもひのたねなれと、ひめかかたみ』との給ひて、わかくろかみを、きりてたへ。『このこそては、身つから、いまはのとき、きてきたる』とて、このくろかみをゝしつゝみて、はゝうへさまにまいらせて、『こせをは、かならず、とはせてたひ給へ』と、いとねんころに、いひつたへてたひ給へ。いかに、あれなるきやくそうたち、かへらせ給はぬそのさきに、身つからに、とゝめをさして給はれ」と、きえいるやうになき給ふ。

らいくわう、このよし、きこしめし、「けに、たうりなり。ことはりなり。さりながら、みやこにのほりて候はゝ、ちゝはゝに、このことを、よきにあんない申つゝ、あすにはらは、むかひの人をくたすへし。心やすく思ひ給へ。いとま申て、さらは」とて、ものうきほらをたち出て、「たによ、みねよ」と打すきて、いそかせたまへは、ほともなく、大江山のふもとなる、下むらのさいしよにつく。

みつより、おほせけるは、「いかに、ところのものともよ。いそぎ、てん馬をふれさせよ。この女はうたちを、みやこへをくるへし。いかにくゝ、おほせければ、「うけ給はる」と申ける。そのころ、たんはのこくしをは、大宮の大臣殿と申ける。このよしをきこしめし、「さても、めてたきたい」とて、いそぎ、さつしやう、かまへ参らせける、そのひまに、馬にのり物にて、人くゝを、みやこへをくり給ひける。

宮こには、このことを聞よりも、「らいくわうの御のほりを、けんふつせん」とて、さゝめきわたりて、ひかへたり。

〔挿絵・第六図〕

その中に、姫をとられし、いけたの中納言ふうふの人も、出給ひ、「いつくまでも、あひしたい」と、「母うへさま」とて、なき給ふ。

はゝうへ、此よし、御らんして、するくとはしりより、姫君に取つきて、「是は夢かやうつゝか」と、きえ入やうになき給へは、中納言も聞召、「一度はなれし我姫に、二たひあふこそ、うれしけれ」と、いそぎ、宿所に帰らせ給。

よりみつは、参内あり。みかと、えいらんましゝて、御かんは申はかりなし。それよりも、国土あんせん長久に、おさまる御代とそ成にける。「かのらいくわうの、ためしすくなき弓取」とて、上一人より、下万民にいたるまで、かんせぬものはなかりけり。